

「運命共同体」

藤田 崇弘
ふじた たかひろ

僕の運命をにぎるのは、はるきだ。はるきは漢字で暖かく生きると書いて暖生(はるき)と読む。でも僕にとっては寒気のことが多い。四歳僕よりも早く生まれただけにえらそうだ。暖生の生感を研究して生き延びているが、未だ謎が多い。

朝の暖生はとても危険である。目は半分くらいしか開いていないけれど、僕が朝食のパンを多く取ることも見逃さない。トイレは暖生の憩いの場所だから、トイレに入ると長時間出てこなくて、いつも僕は、

「早く、もれちゃうよ。」

とトイレの前で叫ぶことになる。とにかく暖生はマイペースだ。思春期というお年頃を乱用している。

暖生は、車が好きで、車の情報が頭にインプットされている。僕の持っているミニカーも全部把握しているので、僕がこっそり新しいミニカーを買ってもすぐに見ぬく。

「どこで買ったんだ。どうして買ったんだ、構造は知っているか。」

と、問い詰められる。レゴブロックで車を作っても、強度がたりないと叱られ、作り直しをさせられる。とにかく僕のやることは、暖生のダメだしを受ける。

時々、暖生は勉強を教えてくれる。暖生は勉強が得意なようだ。友達にそのことを話すと

「いいお兄ちゃんだね、うらやましい。」

と言われるが、暖生は鬼の教官みたいに怖い。最初はやさしいが、とにかく分かったかどうか、しつこい。僕の知らない裏技みたいなのを披露するが、僕はチンプンカンパン。途中から全然理解できていない。でも面倒なことになると、分かったふりをして、乗り切らなければならぬ。

「お前は、物ごとを知らなさすぎる。本を読んだり調べたりしろ。」

暖生は車の図かんをいつも写経のようにノートにまとめ、エンジン開発のために勉強もしている。そんな暖生はカッコいい。僕の質問にもなんでも答えてくれる。

僕も車が好きで、将来は車の会社を作りたいと思っている。暖生の作った車は世界中の人を助け、地球にやさしい車になると思う。僕が車の絵を正確に描いた時、工作で車を上手に作れた時、

「たか、すごいじゃん。」

と言ってくれる。その時、僕は心がジャンプして、鼻歌と口笛が止まらない。

「一緒に車の開発しようぜ。」

暖生の言葉は僕の心の支えで、夢だ。二人の夢を叶えるため、これからも毎日修行しようと思う。

「暖生これからもよろしく。お兄ちゃん。」